

大学生のキャリア発達に関わる大学での学びと アイデンティティ形成

池 田 智 子

A Review of Studies of the Effects of Learning
and Self-formation on the Career Development of University Students

Satoko IKEDA

Abstract

This study reviewed the researches which have indicated that learning and identity formation are related with career development of university students. The present study suggested that it is necessary to examine how learning and identity formation affect their career development, besides direct factors affecting career decision, for example, career decision-making self-efficacy.

Key Words : career development, learning, identity formation

1. 進路選択・決定に臨む大学生の葛藤

大学生にとって、卒業後の進路選択・決定は大きな意味を持っており、それだけに大きな葛藤を経験するプロセスでもある。日本学生相談学会が公表した「2018年度学生相談機関に関する調査報告」の中でも、増加傾向にある相談内容として進路・就職をあげた大学が40.8%、短期大学が48.2%に上っている。進路・就職の問題が、大学生のメンタルヘルスにも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

人が人生において果たす役割として子ども、学生（学ぶことに従事する人）、労働者、家庭人（配偶者・親）、余暇人（余暇を過ごす人）、市民、その他（年金生活や病気の人など）をあげて、人生における役割の変化を明らかにしようとしたSuper（1980）の生涯発達理論によれば、大学生は、自己吟味・役割試行・職務上の探索が行われる探索段階の移行期（18～21歳）にあり、職業や専門訓練を通して自己概念を充足しようと試みる時期である。また、人間の心理—社会的発達を表す概念としてアイデンティティを提唱したErikson（2011）の考えに基づけば、青年期の重要な発達課題として、自己を問い直す具体的経験である職業選択があげられる。このように、大学生にとって職業の決定は、職業を通して社会の中での自分の役割を獲得するという重要な発達課題である。しかし、この課題は多くの若者にとって容易な課題ではなく、現代の若者の就労に関する問題の中でも、大学卒業時の進路未決定者の存在は大きな問題となっている。

2. 大学生のキャリア発達とアイデンティティ

下山(1986)は、職業未決定の状況にも、積極的な職業探索状態から消極的なアパシー状態までさまざまな状態があるとして、大学生の職業未決定状況を分類する尺度を作成した。下山(1986)によれば、職業未決定の状態には、情緒的に混乱した状態である「混乱」、職業意識が未熟で、将来の見通しが無い状態である「未熟」、努力をせずに安直な就職決定をしようとする状態である「安直」、当面は就職について考えることを回避している状態である「猶予」、就職決定にむけて積極的に模索している状態である「模索」、自分の職業決定に自信を持っている状態である「決定」の6つの状態がある。そして、各未決定状態にある大学生を対象に、Erikson(2011)の6つの発達課題に関連した内容を含む「自分の確立尺度」(例:「自分の生き方は、自分で納得のいくものである」「自分らしさというものがわかってきた」)を用いて、職業未決定状態と自分の確立度の関係について検討している。その結果、自分の確立度は、「混乱」「未熟」状態にある者が低いのに対し、「模索」状態にある学生は、「決定」の状態にある学生と同様に高いことが明らかになった。この結果は、職業未決定の状況を、自我の発達と関係づけて考える視点が必要であることを示すものである。

海外においてもVondracek, Schultenber, Skorikov, Gillespie, & Wahlheim(1995)は中学生と高校生を対象として、職業未決定尺度を用いて、職業未決定の状態(例:「いずれは仕事に就かなければならないが、就きたいと思うものがない」)とアイデンティティ地位(4群)の関係について検討している。その結果、職業未決定尺度得点は、アイデンティティ拡散群で最も高く、次に早期完了群、モラトリアム群の順となり、アイデンティティ達成群で最も低いという結果を得ている。また、Blunstein, Devenis, & Kidney(1989)は大学生を対象として、アイデンティティ地位タイプ得点と環境探索や自己探索をどれくらい行っているかを示す職業探索活動得点との関連について検討した。その結果、アイデンティティ達成得点とモラトリアム得点が高い者ほど、職業探索活動得点が高いことがわかった。

新見・前田・越中・松田・淡野(2007)によればBerzonsky(1990)は、こうしたアイデンティティ地位タイプの代わりに、アイデンティティ・スタイルという概念を提唱している。アイデンティティ・スタイルとは、さまざまな問題を解決する時に、個人が一貫して示す認知的な処理スタイルのことであり、情報スタイル、規範スタイル、拡散/回避スタイルがあげられている。情報スタイルは問題を解決するために積極的に情報を収集、選択しようとするスタイル、規範スタイルは、親などの重要な他者の期待や価値に従って判断しようとするスタイル、拡散/回避スタイルは、問題の解決を先延ばし、回避しようとするスタイルである。これらのアイデンティティ・スタイルは、青年期にある者の進路選択という重要な問題への対応に影響を及ぼすと考えられる。新見・前田・越中・松田・淡野(2007)は、大学生のこのアイデンティティ・スタイルと職業観・勤労観の形成に関連する能力(国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2002)である人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力との関係について検討した。その結果、情報スタイルを使用する者ほど4つの基礎スキルが高く、拡散/回避スタイルを使用する者ほど基礎スキルが低く、規範スタイルの使用は、基礎スキルと有意な関連を示さないことがわかった。情報スタイルを使用する者は、積極的に情報を収集することで、職業観・勤労観の形成に関連する能力が向上するのに対し、拡散/回避スタイルを使用する者は、重要な問題に取り組むことを回避することで、職業観・勤労観の形成に関連する能力が低下すると考えられる。

そして規範スタイルを使用する者は、重要な他者の期待や規範にしたがって問題解決をする傾向があり、職業観・勤労観の形成に関連する基礎スキルと関連を持たないと考えられる。

3. 大学生のキャリア発達と大学での学び

2011年の中央教育審議会の答申では、キャリアを「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」とし、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と位置づけている。大学時代には、就職支援やキャリア科目だけでなく、大学での学び全体や大学生活全体の過ごし方がキャリア発達に大きな影響を果たすことが予想される。

伊藤・王（2015）は、自律的動機づけがエンゲージメントを介して、学業成績及びライフキャリアに及ぼす影響について検討している。エンゲージメントとは、授業などの学習場面において学習者がどのような取り組みをしているかの概念である。伊藤・王（2015）は、エンゲージメントについて、学習への取り組み方に関する尺度（岡田・鳥居・宮浦・青山・松村・中野・吉岡、2011）を用いて検討を行っている。この尺度は、「勤勉的受講態度」「積極的主張」「自発的学習」「計画的学習」の4下位尺度からなる。また、ライフキャリアとは、河崎（2010）によれば、「生涯にわたる役割に関連した実践の道筋・進路」のことであり、職業に関連した一連の道筋・進路である「職業キャリア」と、家庭生活や地域での生活における役割や実践の道筋・進路である「生活キャリア」を含むものである。河崎（2010）は、「ライフキャリアの能力・態度」に関する尺度開発を行っているが、その尺度は「将来展望・設計」「情報収集・啓発的経験への積極性」「意思決定スキル」「肯定的な自己理解」「他者との関係重視」「生活経験・ライフバランス」といった6つの下位尺度からなる。伊藤・王（2015）はこの尺度を用いて、ライフキャリアの能力・態度を測定している。検討の結果、自律的動機づけからエンゲージメントを介してライフキャリアの能力・態度に対して有意な正のパス、また、エンゲージメントから学業成績に対して有意な正のパスが認められた。この結果から、学生生活の中心となる学業に価値を認め、高い意欲も持つ者は、職業を含む生涯の人生役割であるライフキャリアについても高い能力を持っていることが示された。また、伊藤・王（2015）は、ライフキャリアの能力・態度と自己調整学習方略の関連についても検討している。自己調整学習とは、学習者が自分で自分の学習をコントロールしながら学習を方略的に進めていく学習である。この自己調整学習の測定については、自己調整学習方略尺度（藤田、2010）が用いられたが、この尺度は、「プランニング方略」「モニタリング方略」「努力調整方略」の13項目からなる。検討の結果、自己調整学習の「モニタリング方略」「努力調整方略」は、「ライフキャリアの能力・態度」のすべての下位尺度と弱いなし中程度の正の相関がみられ、「プランニング方略」は、「ライフキャリアの能力・態度」の「情報収集・啓発的経験への積極性」以外のすべての下位尺度と弱いなし中程度の正の相関がみられた。この結果は、学習によって培われる「モニタリング方略」「努力調整方略」「プランニング方略」といった学習方略が、ライフキャリアの能力や態度を支えていることを示している。つまり、学習において、苦手であっても努力しようとする方略や、きちんと計画的に学習を進めようとする方略、自分の学習状況を自ら把握して進めようとする方略を持っている者は、学習状況を越えたライフキャリアにおける能力や態度も高いことを示している。

また、ライフキャリアの能力・態度とエンゲージメント、学業成績の間の関連については、エンゲージメントの「勤勉的受講態度」「積極的主張」と、ライフキャリアの能力・態度のすべての下位尺度との間に正の相関がみられ、エンゲージメントの「自発的学習」「計画的学習」は、ライフキャリアの能力・態度の「情報収集・啓発的経験への積極性」以外のすべての下位尺度との間に正の相関がみられた。つまり、大学での深く積極的な学びが、ライフキャリアの能力・態度を高めることが示された。また、学業成績は、「ライフキャリアの能力・態度」の下位尺度のうち、「意思決定スキル」のみと弱い正の相関がみられたことから、ライフキャリアの能力・態度には、学業成績そのものというよりも、学びにどう取り組んでいるかが影響することが示唆された。さらに、教職希望の学生においては、教職志望度が高い学生ほど、エンゲージメントが高く、ライフキャリアの能力・態度が高いという結果から、将来の具体的進路に結びついている学びの深さが、ライフキャリアの能力・態度に関係していることも示唆された。

4. 大学生のキャリア発達と自己形成活動

溝上・仲間・畑野（2016）は、アイデンティティ形成を自己形成という視点から検討している。溝上（2011）によれば、自己形成とは、「自己を主体的に、個性的に形作る行為」であり、「自己の主体的・個性的な形成それ自体に焦点を当てたものであり、アイデンティティ形成のように、抽象度の高い、一般的な水準での自己の時間的・空間的まとまりを問題としない」ものとしている。そして、その自己形成活動として、「専門・専門外を問わず、いろいろなことに興味を持って勉強する」や、「いろいろな活動に参加してたくさん友達を作る」など、自分を成長させるために具体的に取り組んでいる活動をあげている。溝上・仲間・畑野（2016）は、この自己形成を測る自己形成活動尺度を作成し、その尺度で測定される自己形成活動が、時間的展望（目標志向性・職業キャリア自律性）を介して、アイデンティティ形成にどのように影響しているのかを検討している。検討に際して、アイデンティティ形成を示す指標としてアイデンティティ（EPSI 5th（畑野・杉村・仲間・溝上・都筑，2014））、目標指向性（時間的展望体験尺度（白井，1997）の下位尺度「目標指向性」）、職業キャリア自律性（職業キャリア・レディネス尺度（坂柳，1996）の下位尺度））を用いた。

その結果、自己形成活動の有無によって、アイデンティティ形成（EPSI統合・EPSI拡散）の得点に有意差が見られ、自己形成活動を行っている方が行っていないよりもEPSI統合得点が高く、EPSI混乱得点が低いことがわかった。また、自己形成活動尺度の得点について探索的因子分析を行ったところ、「興味関心の拡がり」「関係性の拡がり」「将来の目標達成」「将来への焦り」の4因子が抽出された。

自己形成活動尺度と目標指向性・職業キャリア自律性、ならびにEPSI統合・EPSI混乱との相関関係を調べたところ、EPSI統合は、自己形成活動、目標指向性、職業キャリア自律性すべてと有意な正の相関がみられ、EPSI混乱は、自己形成活動の「興味関心の拡がり」「将来の目標達成」以外の変数と有意な負の相関がみられた。職業キャリア自律性と中程度の正の相関を示したのは、自己形成活動の「興味関心の拡がり」であり、「将来の目標達成」「関係性の拡がり」と弱い正の相関を示した。

また、パス解析の結果、自己形成活動が、直接アイデンティティ形成に影響をおよぼすのではなく、時間的展望（目標成功性・職業キャリア自律性）を媒介して、アイデンティティ形成に影響

響を及ぼすことが示された。また、自己形成活動の「将来の目標達成」や「将来への焦り」は目標指向性・職業キャリア自律性に影響を示したが、「興味関心の拡がり」は職業キャリア自律性には影響を及ぼしていたものの、目標指向性へは強い影響を及ぼさないことがわかった。時間的展望を伴う自己形成活動は、一般的な時間的展望（目標指向性）には影響を及ぼさず、具体的な時間的展望（職業キャリア自律性）に影響を及ぼすことがわかった。

これらの結果から、「専門・専門外を問わず、いろいろなことに興味を持って勉強する」や、「いろいろな活動に参加してたくさん友だちを作る」など、大学での広い自由な学びが職業キャリア自律性と結びつき、そこからアイデンティティ形成につながる道筋が示唆された。

5. 大学生のキャリア発達と学習動機づけ

溝上（2009）は、学業に加えて対人関係など様々な活動に積極的に取り組む大学生が高い成長感、職業意識を持っていることを示しているが、畑野（2013）は、大学生の学習動機づけとキャリア発達との関係を検討している。大学生は日々の学習について、将来を模索しながら学習の意味を模索する必要がある。これまでも、大学生がキャリアの選択という視点を通して大学で学ぶことの意味を考えることの大切さや（溝上，2009）、大学生の自律的な学習動機づけに、キャリアの視点が大きく関わっていること（溝上，2001；櫻井，2009）が報告されている。畑野（2013）は、授業だけでなく、キャリアを含めて、授業内、授業外、自主学習を含めた全般的な学習の影響を検討している。畑野（2013）は研究Ⅰにおいて、学習動機づけ尺度を作成し、学習動機づけと、学習・キャリアに対する認知・感情・行動との関連を検討し、研究Ⅱにおいて、学習動機づけが授業行動、全般的な学習行動に加えて、職業選択に対する積極的関与に与える影響を検討している。用いた尺度は、学習動機づけ尺度、キャリアに対する認知を測る尺度として目標志向性尺度（例：「私にはだいたい将来設計がある」）、キャリアに対する感情を測る尺度として進路決定不安尺度（例：「将来の職業を決めることに対して不安がある」）、学習行動を測る尺度として学習に対する積極的関与・継続意志尺度（例：「自分では学習意欲は高い方だと思う」「できるだけ長く勉強を続けたい」）であった。

学習動機づけと学習・キャリアに対する認知・感情・行動との関係について、「目標指向性」、「進路決定不安」、「積極的関与」「継続意志」との相関分析の結果、学習動機づけの因子である「向上志向」「知的好奇心」は「目標指向性」、学習に対する「積極的関与」「継続意志」と弱い～中程度の有意な正の相関、学習動機づけの因子「知的好奇心」は「進路決定不安」と弱い負の相関、学習動機づけの因子「将来不安」は「進路決定不安」と中程度の正の相関、「目標指向性」と有意な中程度の負の相関がみられた。つまり、学習動機づけの因子「向上志向」と「知的好奇心」は適応的な学習・キャリアの変数と正の関連、「知的好奇心」は不適応的なキャリアの変数と負の関連、「将来不安」は適応的なキャリアの変数と負の関係、不適応的なキャリアの変数と正の関係にあるものの、学習に対する「積極的関与」「継続意志」とはほぼ無相関であった。研究Ⅱでは、学習動機づけ尺度、自己決定性を測る自己決定欲求尺度（例：「自分のことは自分で決めたいと思っている」）、授業行動を測る授業プロセス・パフォーマンス尺度（例：「課されたレポートや課題を少しでもよいものに仕上げようと努力する」）、全般的な学習行動を測る深い思考尺度（例：「学んだことを実生活の中で試してみる」）、職業的関与を測る職業レディネス尺度の下位尺度である「関与」（例：「職業を選択する事に対してかなりやる気がある」）を用いて検

討を行った。学習動機づけと授業行動、全般的な学習行動、職業的関与との関係を検討した結果、学習動機づけの因子「向上志向」は「授業プロセス・パフォーマンス」「深い思考」「関与」と中程度の正の相関、「知的好奇心」は「授業プロセス・パフォーマンス」「深い思考」と中程度の正の相関がみられた。すなわち、学習動機づけの因子「向上志向」は全般的な学習行動、授業行動と職業的関与を促進し、「知的好奇心」は、全般的な学習行動、授業行動を促進することが示された。研究の結果から、「向上志向」はキャリアに関する変数と関連しているのに対し、「知的好奇心」は学習に関する変数と関連している学習動機づけであることがわかった。この研究では、大学生の学習動機づけの因子である「向上志向」（例：「物事を多様にみることができから」「新しい視点を得ることができから」「自分の成長につながるから」）を動機とした学びがキャリアに関する変数と関連していることを示している。つまり、大学生の学習に対する動機づけの影響が、学習成果のみに限定されるのではなく、キャリア発達にまで及ぶ可能性を示している。

6. 大学生のキャリア発達と大学生活

溝上（2009）は、大学生の大学生活の過ごし方が「学生の学びと成長」をどのように説明するかを検討するために、学習を授業内学習と授業外学習、授業外学習を、授業に関連する「授業外学習」と授業とは関連のない「自主学習」に分類して検討を行っている。溝上（2009）は、大学生活の過ごし方として、授業、授業外学習、自主学習、読書、漫画・雑誌、クラブ・サークル、アルバイト、同性・異性の友人とのつきあい、テレビ、ゲームなどのどこに大学生活の重点を置いているかや、知識・技能の獲得、将来設計、充実感、「交友志向」「自己向上志向」「経験関与的課題志向」「職業・専門性志向」「特定課題志向」という5つの下位尺度からなる学習動機を測定する尺度を用いて検討を行っている。

まず、学生生活について1週間に費やす時間数を因子分析して、「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・マンガ」「友人・クラブ・サークル」の3因子を抽出し、をこの3因子の因子得点を用いてクラスタ分析を行い、4つの学生のタイプを見出した。タイプ1は「インターネット・ゲーム・マンガ」だけが他の生活因子に比べて得点が高い群、タイプ2は、すべての生活因子について得点が低い、際立った大学生活の特徴が見られない群、タイプ3は、「授業外学習・読書」「インターネット・ゲーム・マンガ」「友人・クラブ・サークル」のどの生活因子の得点も高く、活動性の高い群、タイプ4は、「友人・クラブ・サークル」だけが他の生活因子に比べて得点が高い人間関係重視群であった。

授業学習時間についてはタイプ2でもっとも低く、タイプ1、3、4の間には有意差が見られなかった。授業外学習、自主学習ではタイプ3がもっとも高く、タイプ4と有意差が認められた。学生タイプと知識・技能の獲得との関連を見ると、「知識・技能全般（授業）」「専門的知識・技能（授業外）」の2因子においてタイプ3が、「関係性・課題遂行能力」においてタイプ3・4が他のタイプよりも得点が高かった。また、学生タイプと充実感・将来設計との関係を見ると、充実感ではタイプ3と4の得点が最も高く、将来設計では、タイプ3の得点が高いことがわかった。また、学生タイプと学習動機との関係を見ると、学習動機の下位尺度「交友志向」「自己向上志向」ではタイプ3と4の間には有意差はないものの、「経験関与的課題志向」「職業・専門性志向」「特定課題志向」ではタイプ3がタイプ4より高いことがわかった。

これらの結果から、1週間の大学生生活の過ごし方で分けた4タイプの学生の中で、大学生生活がもっとも充実しているのはタイプ3と4であったが、知識や技能が身につけている、将来展望を持っているなどの項目で高得点を示すのはタイプ3であることが示された。タイプ3の学生は、授業に出席しつつ授業外学習や読書も行い、遊びや対人的な活動にも多くの時間を費やすタイプである。こういった授業内・授業外での学習や生活を大切にする、いわば「よく遊び、よく学ぶ」タイプの学生の将来展望の高さが、キャリアに対する態度とどう結びつくのかを今後明らかにする必要がある。

7. 大学生のキャリア発達に関する研究の今後

これまでの大学生のキャリア発達に関わる進路選択・決定過程について検討を行った研究では、進路選択・決定に関わる自己効力感や結果期待といった、進路選択・決定についての個人の認知が進路選択においてどのような影響を及ぼすのかといった検討が盛んに行われてきた。たとえば、Bandura (1977) の提唱した社会的認知理論 (Social Cognitive Theory) を進路選択領域に応用した社会・認知的進路理論 (Social Cognitive Career Theory : SCCT) では、進路選択・決定過程を促進するのは、自分は進路選択を「うまく行える自信がある」という進路選択における自己効力感や、進路選択に関わる「行動後に望ましい結果が得られる」という確信である結果期待である。

Taylor & Betz (1983) は、この進路選択に関わる自己効力感を測る尺度としてCDMSE (Career Decision-Making Self-Efficacy Scale) を作成した。CDMSEは、進路選択に関わる能力として、①目標選択 (自分の能力に見合った職業を選択する等) ②自己認識 (自分の能力を正確に評価する等) ③職業情報の収集 (将来携わりたい仕事内容を調べる等) ④将来設計 (自分の将来設計にあった職業を探す等) ⑤課題解決 (困難な問題が生じても目標とする職業につくため頑張る等) の5つをあげている。日本における進路選択に関する研究においてもこのCDMSEに基づく尺度が用いられることが多く、進路選択・決定に関わる自己効力感が高いほど、主体的に責任を持って進路選択を行なおうとする傾向が高いことが示されている (安達, 2001; 富安, 1997)。

しかし、これまで見てきたように、大学生のキャリア発達には、直接進路選択・決定に関係しないような大学での広い学びや活動、そして青年期の課題でもある自己の確立としてのアイデンティティ形成が関わっていることが示唆されている。進路選択・決定は、自分と他者、社会との関係を新たに構築し、社会の中での自分の役割を認識するプロセスであることを考えると、これらが大学生のキャリア発達に関係していることは当然のことであると考えられる。今後、大学生のキャリア発達、進路選択・決定過程の検討を進め、さらにはそれを具体的なキャリア教育や支援につなげていくためには、大学での学び全体や大学生生活の過ごし方、そしてそこからつながるアイデンティティの形成にまで視点を広げて検討する必要があると考えられる。

引用文献

安達智子 (2001) 大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討— 教育心理学研究, 49, 326-336.

- Bandura, A. (1977) Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.
- Blunstein, D.C.,Devenis, L.F.,&Kidney, B.A. (1989) Relationship between the identity formation process and career development. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 196-202.
- Berzonsky, M.D. (1990) Self-construction over the life span: A Process perspective on identity formation
In G.J.Neimeuer & R.A. Neimeyer (Eds.) *Advances in personal construct theory*. Vol.1. Greenwich, CT. JAI Press, 155-186.
- Erikson, E.H. (2011) アイデンティティとライフサイクル (西平 直・中島由恵, 訳) 東京:誠信書房.
(Erikson, E.H. (1959) . Identity and the life cycle. Psychological issues Vol.1, Monograph 1. New York: International Universities Press.)
- 藤田 正 (2010) 大学生の自己調整学習方略と学業援助要請との関係 奈良教育大学紀要, 59,47-54.
- 畑野 快 (2013) 大学生の自律的な学習動機づけの検討—学習・キャリア変数との関わりから— 青年心理学研究, 24, 137-148.
- 畑野 快・杉村和美・中間玲子・溝上慎一・都筑 学 (2014) エリクソン心理社会的段階目録 (第5段階) 12 項目版の作成 心理学研究, 85, 482-487.
- 伊藤崇達・王 松 (2015) ライフキャリアの能力・態度, エンゲージメントと自己調整学習との関係 京都教育大学紀要, 127, 61-76.
- 河崎智恵 (2010) ライフキャリアの能力・態度に関する尺度構成の試み キャリア教育研究, 29, 25-30.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書)
- 溝上慎一 (2001) 大学生固有の意味世界に迫るためのポジション理論 溝上慎一編 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—ナカニシヤ書店 pp.50-66.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 溝上慎一 (2011) 自己形成を促進させる自己形成モードの研究 青年心理学研究, 23, 159-173.
- 溝上慎一・仲間玲子・畑野 快 (2016) 青年期における自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成へ及ぼす影響 発達心理学研究, 27, 148-157.
- 新見直子・前田健一・越中康治・松田由希子・淡野将太 (2007) 大学生のアイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキル 広島大学大学院教育学研究科紀要, 56, 253-261.
- 岡田有司・鳥居明子・宮浦 崇・青山佳世・松村 初・中野正也・吉岡 路 (2011) 大学生における学習スタイルの違いと学習成果 立命館高等教育研究, 11, 167-182.
- 坂柳恒夫 (1996) 大学生のキャリア成熟に関する研究: キャリア・レディネス尺度 (CRS) の信頼性と妥当性の検討 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 20, 9-18.
- 櫻井茂男 (2009) 自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて—有斐閣
- 下山晴彦 (1986) 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 白井利明 (1997) 時間的展望の生涯発達心理学 東京:勁草書房
- Super, D.E. (1980) A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-298.
- Taylor, K.M., & Betz, N. E. (1983) Applicatinons of Self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22(1), 63-81.
- 富安浩樹 (1997) 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究, 8(1), 15-25.
- Vondracek, F.W., Schultenber, J., Skorikov, V., Gillespie, L.K., & Wahlheim, C.(1995) The relationship of identity status to career indecision during adolescence. *Journal of Adolescence*. 18, 17-29.